

Th.W.アドルノは『美の理論』（1969）において、自然の美的認識には一定の自然支配が前提として必要であり、自然美の経験には常に人間の支配によって傷ついた自然の姿と、両者の宥和という想念が固く結びついているという洞察の上に立ち、芸術をこの想念に形を与えようとする行為、「自然でも、個々の自然美でもなく、自然美そのものを模倣する」行為と定義した。この宥和の想念としての「自然美そのもの」は、あくまで可能性であり、対象としても概念としても把握出来ない。ただ瞬間的に閃く「全ての規定に対する不規定」である。だが音楽はそれと類似性を持ち、特にシューベルトにおいて「最も深い効果」を引き出した。この一節（Th.W. Adorno, *Gesammelte Schriften*, Bd.7, S. 113.）は彼の自然美観の焦点として頻繁に言及される一方、なぜ「自然美そのもの」が閃く音楽が他ならぬ彼なのか、という点に深く踏み込んだ研究はあまり見られない。その理由は、アドルノが彼について纏まった分量を持って論じたのがほぼ、最初期のエッセイ『シューベルト』（1928）のみである、という量的・時間差の問題にある。しかしこのエッセイでは、作品が豊富な自然隠喩によって論じられ、音楽と自然の類似性という、上記に通ずるテーマが成立している。このエッセイでアドルノは、当時の音楽学会に典型であった、動機労作の徹底によって音楽を高度な有機体に仕上げたベートーヴェンと、そうした構成能力に劣るが故に、作品が「ポプリ（バラード）」の様になっているシューベルト、という対比を継承する。しかしその上で後者に（能力の欠落ではなく）鋭い芸術的感性を見いだしている。アドルノは強靱な主観性で有機的に纏め上げられたベートーヴェンの音楽は、体系と目的論的志向を有した「花を咲かせる植物」「火山」といった自然像を喚起することを認める一方、動機を全体の為だけに生み出し利用し尽くしている、支配的な圧力も聴き取れると指摘する。彼に寄れば、シューベルトの「ポプリ」の狙いは、主観的構成力の「暴力」とは「別の法則」を模索することにあつた。しかし思い浮かんだ主題を労作せずに並置する「形式ならぬ形式」による彼の非主観的・非支配的な音楽には、有機的結合も発展もなく、その反復性は「植物的というより結晶的」な凝固した自然像と、そこに囚われた無力な主体という「死の風景」を導いてしまう。だがアドルノは、この凄惨な風景は聴く者に、人間と自然が互いに支配せず結ばれる「究極の和解」を否定的に喚起し、そしてその和解も瞬間的で「幻のように捉えどころがない」が、彼の作品に行き渡っている、と主張する。本発表は、アドルノがこの時シューベルトの音楽に見いだした閃きは、『美の理論』における「自然美そのもの」に通じていることを主張し、このエッセイを、彼がその独自の自然美観を、両作曲家の音楽の自然との類似性の考察において獲得した、探求のプロセスとして位置づけることを目的とする。